

# 道成寺創建縁起と『道成寺縁起』

大橋直義

## 一 研究動向

道成寺には、重要文化財に指定される『道成寺縁起』<sup>(1)</sup> 絵巻二軸のみならず、相当数の古典籍・古文書が蔵されている。しかしながら、重文絵巻やそれに先立つ説話および芸能「道成寺物」に注目が集まるあまり、その経蔵資料に注意が払われることはほとんどなかった。<sup>(2)</sup> 小稿は、それらを参看しつつ道成寺創建縁起について考察を行なうものである。

経蔵資料を一望するに、詞書筆者を後小松院、応永の制作とする伝は十七世紀の絵巻・什物の開帳興行における口上に遡る。<sup>(3)</sup> 天和元年以後の諸国巡見使来訪、聖護院・三宝院両門跡の葛城入峯行の際には、<sup>(4)</sup> 天正元年十二月頃に由良興国寺で足利義昭が披見したときと同様、重文絵巻を披いて貴顕を接遇している。<sup>(5)</sup> 元禄五年以後度々行なわれてきた開帳興行でも重文絵巻が披かれていたが、十七世紀から現在に至るまで日常的に行なわれてきた「絵とき」<sup>(6)</sup> では模本が使用される。詞書

筆者・制作時期に関わる右の伝は近世後期頃でも通説であったと思しい。しかしながら、重文絵巻の絵と画中詞との部分的な不対応から、そもそも重文絵巻はこれに先立つ「原絵巻」の模本であることが指摘されており、<sup>(7)</sup> したがって、天正年間以前の段階で「原絵巻」は失われ、以後、重文絵巻そのものの制作経緯とは異なる言説が重文絵巻を披きつつ行なわれてきたことになる。

重文絵巻修理完了を記念して開催された和歌山県立博物館二〇一七年度特別展「道成寺と日高川―『道成寺縁起』と流域の宗教文化」において研究史が大きく更新された。高岸輝論考<sup>(8)</sup> では重文絵巻の制作時期と環境について次の結論が示された。

◎重文絵巻は、南都絵所（芝座）琳賢の周辺で、享禄・天文年間頃に制作。発注者は、幕府奉公衆で、龜山城・小松原館を本拠とする湯河氏の最盛期を担った湯河直光であった可能性が高く、したがって成立下限は直光が教興寺の戦いで敗死した永禄五年。<sup>(9)</sup>

◎天正元年十二月、足利義昭が興国寺で披見しえたのは湯河直春の差配によるか。

「原絵巻」が応永期に制作されたとする伝に關連して、『古画備考』卷三十三「土佐広周」および『改訂増補考古画譜』卷九「日高川及紙」が指摘する「応永七年奥書本」に注意しておきたい。『古画備考』は重文絵巻への言及に続けて次のように記す。

○一本同縁起二卷。図ハ右ノ通りナリ。古物ナルモノ。上卷奥書「応永七年庚辰二月日出立庄藤井村書写」。下卷奥書「応永七年庚辰二月日紀州名草郡日方村書写畢」。

『考古画譜』は類同の本奥を有する交詢社本を掲げ、その「模本」として桑名藩松平家本の存在にも言及する。しかしながら現段階では応永七年奥書本の所在は明らかではなく、それが「原絵巻」に類するものであったのか、あるいは酒井家旧蔵「賢学草紙」根津美術館蔵「賢草紙絵巻」等の「日高川草紙絵」に類するものであったか、判然としない。ただ、『古画備考』が重文絵巻と「同」「右ノ通り」とすること、酒井家旧蔵本が十六世紀半ばの制作と考えられることから、<sup>(9)</sup> 応永七年奥書本は重文絵巻に先立つ一本であったと見ておくべきだろう。<sup>(10)</sup>

小稿に關わる道成寺の動向はおよそ次のように整理できる。

- 大宝年間<sup>(七〇一)</sup> 文武天皇勅願創建伝承
- 正平十二年<sup>(三五七)</sup> 本堂建立開始
- 同年 永代不斷経会創始（『真海代記録』紙背）
- 正平十四年 梵鐘再鑄
- 正平二十年<sup>(三七四)</sup> 本尊遷座（『真海代記録』紙背）
- 天授四年<sup>(三七四)</sup> 源金毘羅丸（吉田頼秀三男）銘鬼瓦銘
- 南北朝<sup>(一三三六)</sup> 秘仏「北向千手観音立像」造像（旧本尊輔仏）
- 応永年間<sup>(一四二四)</sup> 『道成寺縁起』成立伝承

- 応永七年<sup>(一四〇〇)</sup> 同年奥書本（『古画備考』等）
- 文明九年二月<sup>(一四七七)</sup> 《鐘巻》上演（『親元日記』十三日条）
- 文明十三年<sup>(一四八〇)</sup> 道成寺蔵「大門勸進状」
- 享祿・天文頃<sup>(一五五八)</sup> 重文「道成寺縁起」制作
- 天正元年十二月<sup>(一五七三)</sup> 足利義昭、重文絵巻披見

「原絵巻」の成立に關し、その画期としてしばしば想定されてきたのが正平十四年の梵鐘再鑄事業である。しかしながら、この時期、本堂建立や旧本尊の部材を内部に収めた「輔仏」造像など、複数の事業が同時並行的に進められていて、「鐘」のみと結びつけることに躊躇がないわけではない。加えて、重文絵巻で描かれる伽藍は正平年間に建設の途上にあつたことを考えるならば、「原絵巻」成立をこの時期に限定せずに検討する必要も生じてくるであろう。

## 二 創建縁起の展開

正平十四年銘の梵鐘が「文武天皇勅願」による創建とする最古の記録である。その後、文明九年二月十三日の上演記録のある《鐘巻》には、小松原の海士の娘が観音像を安置供養、体が金色に光り輝くという奇瑞を得て宮中に召され、使者であつた道成によつて道成寺が創建されたとする縁起が見える。<sup>(11)</sup> 周知のごとく信光改作《道成寺》にはこの縁起は見られない。

重文絵巻の詞書には、卷下冒頭に次のように記されるのみである。日高郡道成寺と云寺は、文武天皇之勅願、紀大臣道成公奉行して建立せられ、吾朝の始出現千手千眼大聖観世音菩薩の靈場なり。

ほとんど注意されてこなかった創建縁起の中で、例外的に広く知られているのが、文政四年写『道成寺宮子姫伝記』<sup>〔24〕</sup> 絵巻二軸である。紙本・絹本の相違はあるものの、『清姫鐘巻伝記』二軸と一具として道成寺に蔵される。長く美しい髪を持つ海士の娘の名を「宮」とするところが、文武天皇に入内し、聖武天皇生母となった藤原宮子を想起させるといふ点でセンセーショナルに紹介された。とはいへ、この絵巻を創建縁起の典型と見ることは難しい。後述のように、創建縁起では、醜かつた娘が一夜にして美女と変ずる、或は髪が伸びる等の靈験が語られるが、この絵巻では靈験的側面を排除するゆえである。

南北朝期の道成寺に初めて確認される創建縁起が、いつごろ、いかにして海士説話として再編されるに至ったのか。また、創建縁起と重文絵巻との関係はいかなるものなのか。これらの問いについて考えるために、やや迂遠ながら近世における展開を確認しておく。

〔十七世紀中期〕伝豪倪権僧正写『紀州道成寺御建立略縁起』一軸が一書として伝わる創建縁起の最古の事例である。

抑当寺開闢者人皇四十二代 文武天皇の勅願、紀大臣道成公、奉行にて大宝元年の御草創、本尊は海中より出現し給ふ千手観世音なり、其由来は往昔当山と隣峯八幡山の間、入江なり、依之当山より八幡山へ橋か、れり、此八幡山の麓に海士夫婦柴の庵を結び、日夜うろくすを漁り、年月を送りしか、有時、海中へ入りしに海底俄にしんとうし、見事日月のことくなり、海士、此見におとろき、肝をけし、いそぎ海上へあかりし所に、ふしきなるかな、御長一寸八分の閻浮檀金の千手観世音、海士のもと、りに取つき上せるに、夫婦の者は奇異の思をなし、庵に御供いたし、伝へ聞仏

とやらんにて渡らせ給はんと、庵の内に棚をかまへ安置して、香花供養し奉る、其夜の靈夢に、汝よくきけ、我はこれふたらく世界の観世音なり、一切衆生化渡せんため、かりに此土に出現せり、汝等信心の輩なれば、所願を成就得させん、望に任て願ふへしとの御つけなり、海士夢中にこたへてはいはく、そも難有御告哉、我此卑賤の身にして、国も所領も何かせん、七珍万宝も望なし、唯願は、かたちみにくき一人の娘を、あはれ観世音の御方便にて美女になしてたひ給へと、合掌恭敬すと思へは夢さめ、其夜の明をまち兼て、娘のかたちをみれば、不思議なる哉、忽かたちへんして、容顏美麗なり、夫婦の者は観世音の御方便とはおもひながらも、余り俄にかたち変し給ふゆへ、我子とは思われず、仏菩薩のことくに礼拝恭敬し給へは、娘は迷惑いたし、何とて左様にし給ふぞや、みつから心はよの常に替る事なしと申ければ、海士夫婦は悦び、さては我子か有かたや、夕部か様の靈夢を蒙りしか、汝かかたち一夜に變して、国士無双の美女となれりと、始め終をかたりしかは、娘もすいきの涙、身にあまり、みつからかたち勝てみにくきを、両親朝夕なげきかなしみ給へは、観世音の御慈悲の御方便にて、忽か様の姿に變ること、偏千手の御方便なりとて、両親娘諸とも、日夜香花をさ、け、観世音を念し奉る、扱此事当国他国にかくれなく、即 御門へ奏聞有、依之、文武帝皇より勅使として紀の大臣道成公下着して、彼娘を内裏へともなひ、后妃に備へ奉る 御門、娘をえい覽まし、御寵愛限なし、依之靈験たつとき観世音の風雨にうたせ奉らん事勿躰なし、急き御堂を建立し、御仏を奉納へしとの宣旨なり、依之紀大臣 勅を蒙り、

紀州日高郡矢田の庄に七堂伽藍を御建立まし、御長一丈二尺の千手観世音の木像にきさまさせ給ひ、御腹内へ彼閻浮檀金の観世音をこめさせ安置し給ふ、今本堂の本尊是なり、去は天子の勅願所なれば、山号は天音山、寺号は道成公奉行にて御建立なれば道成寺と号し、院号は観音方便の寺なれば千手院と号、皆是勅号也、誠なる哉、生身のゑんふたんの観世音、一切衆生利益のために、かりに出現し給へば慈眼視衆生福聚皆無量の金言明かなれば、此靈場に請て、是像を拜奉り、深信あらん輩は現世安穩後生善所之所願を成就せずといふことなし、扱彼道成公は紀道大神と諡して、三百瀬村に今社有之、又海士夫婦は子海士王子と祝せしめ、八幡山の麓に是も社有之、具には御縁起に有之、ゆへ略之、

道成寺と八幡山の間は入江で、そこに架かった橋のたもとに住まう海士が一寸八分の千手観音像を感得する。醜かった娘が一夜にして美女になるといふ奇瑞が起き、紀道成によって見いだされた娘は后妃となる。文武天皇は伽藍を建立し、海中出現の像を胎内に籠めた本尊を制作、安置する。道成は紀道大神として崇められ、海士夫婦は「子海士王子」として八幡山の麓に祀られたとする。この段階では「宮子」でも「髪長姫」でもないのである。

八幡山は道成寺の西傍に位置し、山腹に吉田八幡社、麓には熊野古道が通り、路傍にはかつて海士王子が鎮座していた。古道は御坊駅南の小松原宿の周辺を抜け、中世城郭・亀山城を背にして田辺方面に向かう。道成寺と八幡山の間には田園が広がるが、かつては北方の白馬山脈を水源とする河川によって形成された三角州であった。時期は不

明ながら、往時の門前は入江であったのだ。<sup>(16)</sup>

これまでに判明した創建縁起一覽である（無番号のものは原本未見）。

①《鐘巻》<sup>(二四七七)</sup> 文明九年以前

②道成寺蔵 文明十三年写 『大門勸進状』(第四〇函)

③道成寺蔵 慶安二年真海写 『本堂修理勸進状』(第四〇函)

④道成寺蔵(十七世紀中期) 伝豪俣写 『紀州道成寺御建立略縁起』

(第六一函)

⑤道成寺蔵(十七世紀末期) 写 『紀道大明神縁起』 絵巻一軸<sup>(17)</sup>

⑥架蔵(江戸中期) 写 『道成寺創建縁起残欠』 一軸

⑦石川透氏蔵(享保五年) 写 『道成寺縁起』 一冊

○塩崎勝治氏蔵(享保十四年) 写 『道成寺由来並二縁起』 一冊<sup>(18)</sup>

⑧寛延三年刊 元文四年礼淵序 『梵鐘蟠園道成寺靈蹤記』 五卷六冊

⑨道成寺蔵宝曆十一年写 『縁起口上書上』 一冊(第二四函)

⑩石川透氏蔵(江戸後期) 写 『道成寺縁起』 絵巻一軸(淡彩)

⑪日文研蔵(享和三年) 写 『日高川鐘巻道成寺縁起』 一冊(絵入本)

⑫文化十三年<sup>(一八一六)</sup> 菅江眞澄『筆のまに〜』巻四「なぐさのくあま」<sup>(19)</sup>

⑬架蔵(文政元年) 刊 『紀伊国日高郡鐘巻道成寺縁起』 一冊

⑭架蔵(江戸後期) 刊 『紀伊国日高郡道成寺略縁起』 一冊

⑮柳瀬家蔵(江戸後期) 写 『紀州日高郡鐘巻道成寺縁記』 絵巻一軸

⑯道成寺蔵(江戸後期) 写 『道成寺宮子姫縁起・甲本』 継紙(第

六二函)

六二函)

⑰道成寺藏〔江戸後期〕写『道成寺宮子姫縁起之本』継紙（第六二函）

⑱道成寺藏 文政四年写『道成寺宮子姫伝記』絵巻二軸

○徳田和夫氏藏天保十年写『鐘巻道成寺』一冊

⑲石川透氏藏安政二年写『道成寺由来記』一冊

⑳高野山三宝山藏安政七年写『道成寺由来喜代姫の縁起』一冊

㉑日文研蔵〔江戸末期〕写『道成寺縁起』絵巻三軸（淡彩 巻下）

注目したいのが⑤である。冒頭は略縁起と同様だが、娘は単に醜いではなく、生まれつき髪が伸びないとされる。霊験によつて美しく髪が伸び、その髪が内裏の鳥巢から見つかったことが入内のきっかけとなる。一方、一寸八分の観音像が海士の髻にとりついて出現したこと、

観音の霊験によつて（髪が伸びるのではなく）容貌が美しく変じたという「略縁起」と同様の一説が二字下げて記される。つまり、この絵巻には髪長姫型（⑧では「本縁起」と呼称）・略縁起型と分類しうる二通りの創建縁起が記されるのである。なお、④⑨⑭および⑤⑧の引用本文が略縁起型に該当。③は美女に変ずるとするのみだが、髪が伸びたとしない点から略縁起型と見てよい。⑯⑰は観音像が髻に取り付いたとするも霊験については記さない。

紀州徳川家の庇護を求めて天台に改宗した道成寺は、絵とときと元禄五年以後の開帳興行を通じ、「縁起の寺」として寺院経営を行ってきた。その過程で本縁起型創建縁起は絵巻・絵入本、詞書のみの子として流通していた。では、創建縁起はいつごろまで廻りうるのか。享保五年に書写されたと推定される⑦には次のような文言が見える。

一、堂ハ文武天王之御願、夫より貞享三卯ノ年迄九百八十八年ニ成、〔…略…〕

一、鐘をまき申時代、醍醐天皇の御宇えんちやう六子ノ八月、夫自貞享三寅之年迄七百六拾年になると也、右者享保五子ノ三月三日合於栗林晴天三十三日開帳有之、縁起為聴聞写之者也、

初めて寺外で開催された享保五年の和歌山城下・栗林明王院（現若宮八幡）での出開帳において「縁起」を聴聞・筆写したとする。その「縁起」は本縁起型で、それが貞享三年段階のものであるとすると、⑤よりも廻るかたちでこの型の創建縁起は整っていたことになる。ならば創建縁起はいつごろまで廻りうるのだろうか。

### 三 創建縁起の淵源

②文明十三年「大門勸進状」は次のように記す。

蓋聞当寺者大宝年中之草創、文武天皇之勅願也、遙尋本尊之濫觴一、〔…略…〕爰一童女喜取一尊体、仰奉一婦依一、遂則蒙一揭焉之利生一、結一契於玉牀一、預一過分之臣益一、翻一袖於金中一、〔…略…〕

浜辺で観音像を拾った童女がその利生により后妃となる。海士の存在は明示されず、したがって創建縁起と海士説話を結びつけた確実な初例は《鐘巻》であると考えられてきた。しかしながら、中世道成寺とその近傍に両者の結び付きの痕跡が見えるのである。

昔、文武天皇之御宇、紀州日高郡吉田村と云所に、正八幡の宮居有、此社より道成寺の間は入海二而、此間三町程のなか橋有、此

辺に九海士之里<sup>(一)</sup>、九人之海士有、常に海に入、渡世を送る、「……略……」彼九海士をも神と祝給、九海士王子<sup>(二)</sup>、吉田村と云所<sup>(三)</sup>、今に有也、

吉田八幡と道成寺との間の入江に長橋が架かっていた。九人の海士は神と祀られ、九海士王子と呼ばれたとする。すなわち、この縁起は、道成寺創建縁起でありながら同時に海士王子縁起としても機能しているのである。右は⑦からの引用だが、近世の創建縁起は一定程度共通する内容を有している。④⑤は九人の海士とはしないが、海士王子縁起であることは同様である。

この「海士王子」という表記の背景に海士説話の存在があるのは自明である。そして「九海士王子」とも呼ばれるこの王子の表記は中世のある段階で大きく転じているのだ。『明月記』建仁元年十月十日条「くわま王子」<sup>(一)</sup>、『民経記』承元四年四月二十六日条「久和万」<sup>(二)</sup>、仁和寺藏『熊野縁起』(正中三年本奥)「栗間崎」<sup>(三)</sup>とあるように、十四世紀半ば以前までは「くわま」と表記される王子であった。ところが文明五年正月の本奥書を有す『九十九王子記』には「海士王子 九海士王子ト道成寺記」見ヘタリ<sup>(四)</sup>と見え、文明五年以前——『鐘巻』初演以前に海士説話との連絡が始まっていたと思しい。すなわち、近世に流布した海士説話と関わる創建縁起は中世の段階から道成寺の近隣にあったことが確かだ。『鐘巻』はそこに取材したと推定されるのである。

このように考えるなら、画期たる正平年間におのずと注意が向く。この時期から文明年間までの一世紀ほどの間に創建縁起が形成されたとすることができそうだが、以下、可能な限り、その解像度を高めてみたい。

正平十四年<sup>(一)</sup>の梵鐘銘文に見える「源万寿丸」は道成寺東傍の丘陵に存した土生城を拠点とする逸見万寿丸源清重、「吉田源頼秀」は西傍の八幡山城を拠点とした武士である。頼秀三男の源万寿丸が寄進した天授四年銘の鬼瓦も伝存している。このことから、この時期の特に吉田氏との関わりに創建縁起の淵源を求められるのではないか。

その後の十四世紀末、紀南地域史に大きな転換が訪れる。次の『湯川記写』は南北朝末に北朝方に与し幕府成立後は奉公衆となった湯河氏の家譜である。<sup>(二)</sup>

其頃天下大に乱て、後醍醐天皇の勅命に仍て、官方の武將新田左中將義貞、楠判官正茂、武家の大将足利尊氏と合戦止時なく、紀伊国の八庄司、湯川・玉置・恩地・牲川・貴志・荒川・湯浅・田辺の別当其外世に名有士は皆宮方に成にけり、勤王の戦を致処に、弥太郎(湯河光春)いかに思はれけん、尊氏に属し度々武功有により、尊氏世に、在田・日高・室三郡の内を賜り、日高郡の内、龜山の峰に城郭を構へ、紀伊国の旗頭として代々足利公方<sup>(三)</sup>仕へ給へり、

紀伊国八庄司が南朝方につくところ、湯河氏第三代弥太郎光春だけが北朝方についたとする。光春は中辺路の湯河王子近辺を拠点とする道湯河氏から離れ、日高平野の龜山城・小松原に拠点を形成した人物である。

さて、義満の側室高橋殿と娘達の熊野参詣について、応永三十四年<sup>(一)</sup>に著わされた『熊野詣日記』に、湯河氏と中辺路の道湯河氏についての興味深い記述を見いだせる。<sup>(二)</sup>

廿四日天晴「……略……」しほ屋の浜にて片箱進上、此嶋は権現のと



ひまします嶋なり、飛嶋と申、御宿上野、御まうけ、はしの湯川、廿七日天晴「…略…」御ひる近露「…略…」御宿みもと左衛門か家なり、檜の木のさく、いたにてひろくしつらひたり、おくの湯川か子御むかへにまいる、

海士王子や道成寺に言及はないが、日高平野を抜け、塩屋の浜、さらに宿を上野王子近辺でとり、その準備に「はしの湯川」があたつたとしている。その後、中辺路の近露近辺まで到着した一行を出迎えたのが「おくの湯川」であつた。無論、前者の「はしの湯川」が日高平野小松原を居館とする湯河氏であり、後者が道湯河氏にあたる。さらに注意したいのが「しほ屋」「上野」という地名である。重文絵巻では、逃げる法師に女房が追いついた場所を「こ、は上野といふ所」と画中詞で記し、さらに「塩屋と云所」と記される浜辺を走り抜けて、日高川の渡し場に到着する。内貴家旧蔵本では塩屋と渡し場の場面の間に「小松原といふ所」とする独自場面が描かれている。こういった共通性をいかに捉えるべきか。この熊野参詣が行なわれた応永年間末期は、湯河氏だけでなくつて南朝方に与した紀南武士団がいずれも室町幕府に帰順していた時代である。その後、紀南武士団が再び反目しあう時代を迎えることまでをも考へるなら、義満の縁者による熊野参詣は単なる遊覧とは言えず、少なからず政治的意味合いをも含んだ営為であつたと見るべきであらう。<sup>26</sup>重文絵巻の「上野」「塩屋」という画中詞もまた、「小松原」と同様、湯河氏との関連で理解されるべきではないか。

加えて、応永年間の湯河氏が「はしの湯河」と呼ばれていたことは極めて重要である。創建縁起では入江に長橋が架かるとされていたこ

とを想起したい。図版によって示した通り、絵を伴う伝本のうち⑤⑩に橋が描かれており、特に⑩⑩では鳥居も描き込まれている。⑮では鳥居を縁起冒頭で描いてしまうが、巻末に描く⑮では海士を祀つた海士王子社が道成寺対岸の橋のたもとにあると理解できる。

同様の橋と鳥居が重文絵巻の巻下冒頭にも描き込まれている。幾重にも分岐する日高川と湿地帯からなる中世日高平野を領有していた湯河氏にとって、「橋」が象徴的器物として機能していたことは想像に難くない。近世、本堂の前に「観音宝前之石橋」が架けられたことは偶然ではなく、その記憶の産物と捉えるべきである。巻下冒頭の詞書に示される創建縁起とも呼応させられつつ、そこに橋と海士王子を想起させる鳥居が象徴的に描かれているという事実は、重文絵巻に先立つ「原絵巻」の段階から、海士説話を介在させる創建縁起が延長六年の鐘巻事件の前提であつたことを示している。道成寺本堂の復興が始まつた正平年間頃——つまり八幡山城を拠点とする武士団である吉田氏との関連性の中で創建縁起が生じ始め、さらに少し下つた頃、つまり湯河光春が日高平野に拠点を移し「橋」を一族の象徴的器物として位置づけるようになった応永期初頭、創建縁起の結果としての橋と鳥居を描き込んだ「原絵巻」が成立したのではなかつたか。そのように考へるとき、寺内に伝わる『道成寺縁起』制作伝承との符合に思い至るのである。

### 小括 耕雲の神社縁起制作——法燈派の文脈として

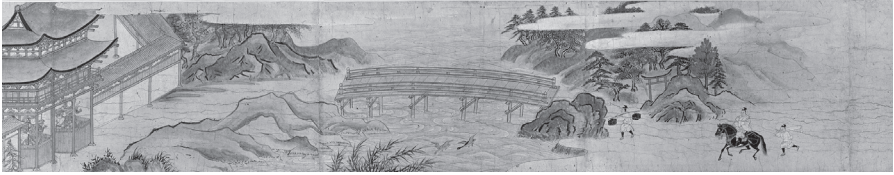
応永期、この地域の神社縁起制作に最も深く携わつたのが古典学



⑱道成寺蔵『道成寺宮子姫伝記』



⑤道成寺蔵『紀道大明神縁起』



道成寺蔵『道成寺縁起』巻下（重要文化財）

者・耕雲（花山院長親／子普明魏）である。耕雲が著述・改作した寺社縁起類を一覧化する。<sup>(28)</sup>

〔一三九四〕 応永元年 『両聖記』著：渡唐天神説話初例

〔一三九四〕 応永元年 『靈巖寺縁起』著（国文研蔵〈自筆本〉）…能仁寺奥

院靈巖寺縁起

〔一三九五〕 応永二年正月 慈眼堂（嵯峨二尊院門前）「中院観音縁起」写（慈

眼堂文書）

〔一四〇二〕 応永九年 『衣奈八幡宮縁起』著（同社蔵〈自筆本〉）…下巻は

在地伝承に即す

〔一四二〇〕 応永二十七年 出雲『日御崎社修造勸進状』著

〔一四二三〕 応永三十一年 『紀州由良鷲峯山法燈円明国師之縁起』書写：原撰

本を改作

〔一四二六〕 応永三十三年 粉河寺本尊戸帳「御願旨趣」執筆（書陵部蔵『粉河

寺続験記）

いずれも臨済宗法燈派に関わる寺社の縁起であると同時に、とりわけ能仁寺・衣奈八幡宮・興国寺は湯河氏が篤く庇護した寺社でもあった。道成寺と法燈派を結ぶ明確な証拠は現在までに見いだせていないが、南北朝に再建された本堂に「禅宗様」が見られることも状況証拠の一つたりえようか。また、史料編纂所蔵『古文书雑集』所収正平十四年十二月三日発給文書に拠れば、八幡山城を中心とする吉田荘領家職が南朝によって和泉国大雄禅寺に寄進されている。大雄寺は大阪府高石市にかつて存した臨済宗法燈派の古刹「浜寺」である。

耕雲の縁起制作については、その方法や関心という点でも興味深い共通項を導き出せる。『耕雲紀行』に拠れば、石山寺に参詣した耕雲



は応永三年から五年の頃、長谷寺に参籠したことを想起しているが、著述対象となった寺院の本尊がいずれも観音であることには注意を払っておきたい。さらに「人間が神と祀られる」ことに大きな関心を抱いていた様子が『耕雲紀行』からは読み取れる。稲田利徳注釈は蟬丸や鈴鹿御前が神と祀られたことに耕雲が強い批判を加えている点に注目するが、その批判精神は、逆に強い関心を持つていたことの裏返しでもあるだろう。海士や紀道成が神と祀られたとする創建縁起を創作しうる素地が、耕雲の関心の中に見いだせるのではないかと今は推定するに留め、別に稿を改めたい。

#### 〈注〉

(1) 小稿では「重文絵巻」と略称する。『道成寺縁起』の呼称の変遷については拙稿「道成寺縁起」書名覚書(『きのみなと』八、二〇二二)参照。

(2) 既存の目録としては御坊文化財研究会編「道成寺古文書目録」(『あかね』二七、二〇〇一)があるが、現状と異なる点も多々ある。

(3) 道成寺の出／居開帳の実際については海津一朗(和歌山大学紀州経済史文化史研究所二〇一六年特別展図録『道成寺の縁起 伝承と実像』第三章)の整理がある。

(4) 寛永十一年「永代禿渡申道成寺事」は「縁篋古筆新筆共」と見え、「新筆」の模本が制作されていた。

(5) 梅津次郎「道成寺縁起絵巻」(『日本絵巻物全集』一八、一九六八、角川書店)、吉田友之「道成寺縁起絵」の表現(『続日本絵巻大成』一三、

一九八二、中央公論社)。

(6) 重文絵巻巻末には義昭花押が捺された料紙と興国寺での披見の経緯を記した料紙が継がれる。起請継で継がれる花押が捺された料紙は他の料紙と同一。識語は別種の料紙に記される(後掲注(7)高岸論考)。

(7) 高岸輝「道成寺縁起」の成立圏―湯河氏と南都絵所の関与をめぐって(『中世やまと絵史論』吉川弘文館、二〇二〇。「初出」二〇一七)。

(8) 国立国会図書館デジタルコレクション。句読点等を補い、『改訂増補考古画譜』(『黒川真頼全集』所収)に拠る校訂を傍記として示した。「土生」は道成寺の所在する鐘卷村東傍の地名。

(9) 千野香織「日高川草紙絵巻にみる伝統と創造」(『金鏡叢書』八、一九八一)。酒井家旧蔵本は『日本絵巻物全集』一八、根津美術館本は「青山莊清賞」八に拠った。

(10) 応永七年本の制作について、注(7)高岸論考は「名草郡日方村」が南北朝後期以後の守護所であった大野郷の近傍であることに着目、守護畠山基国の関与によって道成寺から重文絵巻に先立つ絵巻が借用、転写され、義満主催の絵合に出品されたと推定する。

(11) 大河内智之「道成寺と日高川―道成寺縁起と流域の宗教文化」(和歌山県立博物館特別展図録、二〇一七)を主に参看しつつ、特に正平年間の情報に『真海代記録』に拠って増補した。

(12) 高野辰之「道成寺物の典拠」(『歌舞伎研究』九号、一九二七)、前掲注(5)吉田論考、前掲注(9)千野論考など。

(13) (第一区)「…略…」紀伊州日高郡矢田庄／文武天皇勅願道成寺治鐘鐘、(第二区)「勸進比丘瑞光／別当法眼定秀／檀那源万寿丸／并吉田源頼秀 合力諸檀男女／大工山田道願 小工大夫守長／正平十四年(己亥)三月十一日」(妙満寺蔵梵鐘再刻)。

- (14) 『親元日記』同日条。小田幸子「能『道成寺』の成立―舞台化の方法」『藝能史研究』二二四、二〇一九）は『鐘巻』成立の上限を寛正五年頃と比定。
- (15) 創建縁起は開帳興行の場に即した「略縁起」系統と十七世紀末期制作『紀道大明神縁起』等「本縁起」系統に分類される（拙稿「『道成寺建立縁起』考」東悦子編『わかやまを学ぶ』清文堂出版、二〇一七。同「道成寺建立縁起の展開と来歴」前掲注（11）図録）。
- (16) 『御坊市土地分類並調査（細部調査）報告書』（和歌山県御坊市、二〇〇三）。重文絵巻下巻冒頭の景観は、ある段階での実景であった。
- (17) 「十八世紀初」制作の絵巻一軸が第三世院主盛海によって紀道神社に奉納されている。
- (18) 『美浜町史史料編』史料目録所載。
- (19) 菊地仁「東北地方の『髮長姫』と『玉取姫』」『國學院雜誌』一一四、一一、二〇一三）。
- (20) 徳田和夫「道成寺縁起」の在地伝承系の絵巻翻刻一付、翻刻二種（『学習院女子大学紀要』一一二、二〇一〇）。
- (21) 「略縁起」型の縁起は、遅くとも宝暦十一年の寺内居開帳で出陳されていた「九蟹王子像」警部の画像との対応から、文武天皇像・紀道明神像とあわせた三軸を出陳する開帳興行の場でこそ機能していた（前掲注（15）拙稿）。
- (22) 坂本亮太「日高川流域の中世」（前掲注（11）図録）に詳述される。
- (23) 『美浜町史史料編』所収本文に拠った。
- (24) 『伏見宮家九条家旧蔵諸寺縁起集』（図書寮叢刊、一九七〇）所収本文に拠った。
- (25) 『日本絵巻物全集』一八所収。注（12）高野論考、注（9）千野論考

が本資料の意義に注目する。

- (26) 高橋修編『熊野水軍のさと―紀州安宅氏・小山氏の遺産』（清文堂出版、二〇〇九）。

(27) 『盛海代記録』。所在不明のため原本未調査。『川辺町史 史料篇上』所収翻刻に拠った。

- (28) 福田秀一「花山院長親の生涯と作品」（『中世和歌史の研究』角川書店、一九七二）を補訂した。

- (29) 北裏虎楠・湯川光雄「戦国時代南紀の旗頭湯川一族考」（私家版、一九七七）。

(30) 鳴海祥博「道成寺本堂―建築的特質を探る」（前掲注（11）図録）は由良興国寺の影響を想定する。

- (31) 大日本史料六一―二三所収（史料編纂所蔵色川三郎兵衛編『古文書雑集』謄写本第七冊）。海津一朗氏に御教示を賜った。なお、「大雄禅寺」を大日本史料は紀伊国内の寺院と解するが該当する寺院は存せず、和泉国大雄寺（高石市）への寄進と解するべきであろう。

- (32) 稲田利徳「耕雲紀行」注釈（二）（岡山大学『研究集録』一〇六、一九九七）および同「（五）」（同一〇九、一九九八）。

〔附記〕

貴重な文書・典籍の調査研究をご許可いただいた道成寺院主小野俊成師に記して深く御礼を申し上げます。なお、小稿は科研費18K00318による成果の一部である。